



11 虎之図 黒住章堂 一幅

大正五年（一九一六） 絹本着色 本紙二二・五×五〇・三

大正五年に作者の黒住章堂（一八七七〜？）より、子爵持妙院基哲を通じて献上された品。虎特有の柔らかいあごや胸周りを表現するために、黒い縞模様の部分には墨のぼかしを用いながら、うねる毛を一本一本丹念に描いており、写実性へのこだわりがうかがえる。そしてまた、前脚を踏ん張る力強い姿勢や、顔を真横に向け、じっと一点を凝視する鋭い眼差しからは、皇室へ献上するにあたり、虎の勇ましさや雄々しさを表そうとした作者の意識が感じられる。

作者の黒住章堂については、本作品の箱書きに大阪市在住とあることその他には、どのような画歴の人物であるのかが判然としない。しかし、昭和十四年に廃寺となっていた逗子の高養寺（高野山真言宗）を再興し、堂内の襖絵、天井画等を描いたことが知られる。そして、同寺に残る再興当初に用いられていた本尊前机の扉には、真言宗の管長をはじめとする再興に関わった功德主らの名が列記され、末尾に「中興開山住職権少僧都 北宗画家 黒住章堂 六十三才」とある。ここから、章堂が北宗画（漢画系）の流れをくむ

画家であること、そして再興した高養寺の住職を自ら務めたことがわかる。また原籍が岡山県御津郡一宮村（現在の岡山市北区一宮）であることも記されている。

高養寺の襖絵に描かれるのは荘厳な高野山の風景であり、外陣の格天井には魚を多く含む動植物を中心に、七福神や富士山などが描かれる。そして本尊を祀る内陣の天井には、中央に巨大な雲龍図が描かれ（現在は取り外され軸装となっている）、それを囲むように虎を含む十二支の動物たちが描かれる。これら、バリエーションに富んだモチーフの多くに認められる、打ち込みの強いしつかりとした筆線は、たしかに章堂が北宗画を学んでいたことをうなずかせるものであるが、動物の柔らかな体毛や、薄く可憐な花びらなどは細やかな筆線で描写されており、この点は本図の虎の描写とも共通する。また写実性への傾倒や陰影表現など西洋画の影響をうかがわせるところもあり、章堂が北宗画を基本としながらも、様々な画風を柔軟に習得した画家であったことがわかる。

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

## 虎・獅子・ライオン

— 日本美術に見る勇猛美のイメージ

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 51

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社 東京美術

翻訳 横溝廣子

発行 宮内庁

平成二十二年七月十七日発行

© 2010 The Museum of the Imperial Collections